『史学雑誌』第123編 第1号　「新刊紹介」142-143頁　2014年1月20日発行
公益財団法人史学会　編集・発行

山田辰雄・松重充浩編著

『蔣介石研究――政治・戦争・日本――』

東方書店　二〇一三・三刊
A5　五六四頁　四五〇〇円

本書は「日本蔣介石研究会」の研究活動の成果であり、スタンフォード大学フーバー研究所所蔵の『蔣介石日記』等の新資料を利用した日中台の研究者による一七本の論稿を収録する。論文集全体は国民党の政治指導における訓政概念に注目し、蔣介石が直面した日本・政治・戦争という重要課題について各々分析した三部構成となっている。以下、各部毎に内容を紹介したい。

第一部「蔣介石と日本」は、蔣介石の日本留学・日本訪問や日本人・「外地」日本人社会の彼に対する眼差しに注目し、彼と日本との関係を分析する。山田辰雄論文は蔣介石の日本留学の事実を解明・再確認し、また家近亮子論文は彼の一九二七年の訪日を『蔣介石日記』と日本の新聞報道により再構築する。松重充浩論文と戸部良一論文は、それぞれ「外地」日本人社会と陸軍の対蔣介石認識の形成過程とその特徴を考察する。また川島真論文は産経新聞『蔣介石秘録』のオリジナリティと『蔣介石日記』引用の意義を再検討する。

第二部「蔣介石と政治」は、政治情勢と直面した課題・権力闘争・人間関係等の局面において蔣介石の政治がどのように展開したかを分析する。横山広章論文は蔣介石に対する個人崇拝の形成過程とその背景を明らかにする。深町英夫論文と張玉法論文は、それぞれ新生活運動における派閥・組織の関係と、蔣介石と李宗仁の党国運営を巡る権力闘争を分析する。楊天石論文は一九四六年の憲法草案修改原則を巡る議論とその過程を解明する。陳紅民論文は蔣介石と胡適の政治的人間関係の全体像を描き出す。松田康博論文では蔣介石が追求した「大陸反攻」作戦が強行されなかった経緯について彼の心理的変化に着目し、中台関係の流れの中で検討する。

第三部「蔣介石と戦争」は、蔣介石の日中戦争を国際的戦場に位置付ける戦術に注目し、戦時下での彼の考えとその対応を分析する。岩谷將論文は国民党の情報組織や特務組織の発展について共産党・日本軍との相互関係をふまえて考察し、また黄自進論文は日本に対する情報理解と蔣介石による建国の青写真と抗敵方針を検討する。段瑞聡論文と鹿錫俊論文は、それぞれ一九四一年の国際環境の変化に対する蔣介石の対外政略の特徴と、対独・対日政策を巡る彼の再選択を究明する。呂芳上論文では一九四二年のインド訪問から蔣介石の戦時外交の経験を考察し、王建朗論文では国民政府による戦後の版図構想の変化を解明する。

従来の蔣介石研究は、国民党と共産党の政治的立場の違いによる政治対立の影響を受け、蔣介石を客観的・全面的に評価する研究はなされず、政治状況から比較的自由であった日本や欧米でも大きな発展はなかった。そうした状況に対して、本論文集は近年の蔣介石に関する資料公開状況の改善という点を生かし、収録論文の多くは扱いにくい日記という資料を適切に利用して、「日本で

©Shigakukai, Tokyo, 2014.

蔣介石を研究する」意義を十分に提示した研究と言えよう。その上、蔣介石個人に対する研究に留まらず、日中戦争研究や台湾研究への広がりも視野に入れている。

（矢久保典良）

©Shigakukai, Tokyo, 2014.